断片 *The Triumph of Life* における "the sacred few" と "those deluded crew"

高　橋　規　矩

I

Shelley の最後の作品である断片 *The Triumph of Life* (1822) において，作者が "the sacred few" (l. 128) と "those deluded crew" (l. 184)[1] との二つの型の人間の生き方を対比させて取り扱っているのが印象的である。[2] しかも，この対比は，残存する断片（総数548行）に関する限りでは，ほゞ一貫して行われていると考えられる。この論文では，二種類の人間のこの興味深い対比に着目して，その各々の生き方の相違，追求する理想の相違を生んでいる根本的な原因を明らかにし，更に，こうした問題に直接関係すると考えられる象徴を指摘し，その意味を解き，断片 *The Triumph of Life* における Shelley の道徳的意図[3]を探って見たい。

II

これに先き立って，この問題の解決に重要な手掛りとなるもの—Shelley が究極的に到達した，人間精神の二つの作用である「想像力」と「理性」との弁別，「想像力」と真善美統一の理念である「愛」との関係，および，それらの象徴など—を概観する必要があろう。

Leigh Hunt をして Shelley を新進の詩人として世に紹介せしめた出世作 *Alastor* (1815) の「序文」で，Shelley は，この詩は「人間精神の最も興味ある状態の一つを寓意したもの[4]」と述べて，この詩の創作意図を明らかにしたが，こゝに用いられている「寓意」という文芸批評上極めて重要な用語を一応用却することが許されるならば，この詩の創作意図は，Shelley の長詩の多くのものに，従って，こゝで取りあげる *The Triumph of Life* にも当てはめられよう。これは，Shelley がその生涯を通じて如何に人間精神の作用の観察に興味をもっていたかを示している。

彼は，恐らく S. T. Coleridge の影響もあって，人間精神の相異なる作用，すなわち，「理性」と「想像力」の弁別と想像力の重要性とを学んだが，この弁別に基づいて彼が実際の批評を行おうとしたのは，1821年の *A Defence of Poetry*（の「第一部」）においてゞあった。勿論，彼が容易にこうした知識に達したと考えてはならない。彼は，その思想の形成の初期に，Locke, Hume, Godwin, Voltaire, D'Holbach, Helvétius などの啓蒙の合理主義・唯物論の思想の影響の下で，"The Necessity of Atheism" (1810-1811) という小冊子や *Queen Mab* (1813) という長詩をものしたからである。しかし，間もなく，彼は，"On Life" (? 1815) や *The Revolt of Islam* (1817) で，「理性」と「盲目的な空想」に対する不信の意を表明した (IX. xxxii-xxxiii)。また，彼が死ぬ約三カ月前，1822年4月11日，つまり，*The Triumph of Life* の執筆中に，彼は，友人であり，すぐれた銀行家でもある Horace Smith に宛てゝ，「フランスの，唯物論の教義は危険であるのと同じ

ほどに偽りである[5]」と書いている。"On Life" に述べられているように，人間の魂はより高尚なものに憧れ，無に対して反発するものである[6]。*A Defence of Poetry* における Shelley の文学観，道徳観，認識論が，「理性」の軽視と「想像力」に対する限りない信頼の上に立っていることは，「理性」と「想像力」の弁別と並んで注目せねばならない。

所で，円熟期において，Shelleyは，Shaftesbury 以来の伝統に立って，真善美一致の理念を懐き，これを，特に，「愛」と呼び，「想像力」をば，これを発見する精神的能力とした。「道徳の大きな秘密は愛である。（中略）人は非常に善であろうとすれば，激しく広範に想像力を働かさねばならない。（中略）道徳的善の大きな手段は想像力である。詩はその根源〔想像力〕に働きかけて結果〔道徳的善〕に資する[7]。」詩は，世俗の靄，「日常性の靄」(the mist of familiarity[8]) を払いのけて，「愛」の真理を暴露する。詩は，われわれが若い頃に懐いていた自然に対する驚異の感覚を，内なる眼からこれを覆い隠している「日常性の薄膜」(the film of familiarity) を拭い去り，再び蘇らせる[9]。「詩は世界の美を隠している覆いを取り払い，日常的なものを日常的ならざるもののようにする[10]。」詩，ないし，想像力の導きによって，「愛」を発見した者らは，*The Triumph of Life* で言われている，"the sacred few" の仲間に加えられよう。「愛」の原理を自らの内に体得し，これを読者の想像力に絶えず訴え続けて来た詩人たち，Dante, Petrarch, Boccaccio, Chaucer, Shakespeare, Calderón, Bacon 卿, Milton, Raphael, Michael Angelo などの詩人が人類の道徳的改善に対してなした寄与は，Locke, Hume, Gibbon, Voltaire, Rousseau などの「単なる理性論者」(mere reasoners) の寄与に比べて計り知れないものがある[11]。何故なら，われわれは俗世の知識には欠ける所がないのであって，「われわれが求めているのは，われわれの知識となっているものを想像化する創造力であり，われわれの想像するものを行為に移そうとする強い衝動である。いわば，生命の詩を求めているのである。打算は意図に優先してしまう。われわれは既に消化し切れぬほど食ってしまったのである。外的世界に人類の広大な領域を拡大して来たこのような科学の発達は，『詩』を欠いたため，丁度それに見合うだけ内的世界を狭めてしまった。従って，人類は，自然を屈服させても，尚奴隷のままである[12]」からである。

さて，*The Triumph of Life* に見られる "the sacred few" と "those deluded crew" との二つの型の人間は，概して，*A Defence of Poetry* における「愛」と「想像力」とを重んじる詩人と，「俗世」に係りをもつ「単なる理性論者」とそれぞれ照応すると考えられるのであって[13]，Shelley が，前者に対して「鷲」，「太陽」，「金星」などの象徴を用い，他方，後者に対して「梟」，「月」などの象徴を用いていることに留意しなければならない。すなわち，彼は，*A Defence of Poetry* で，「もし，打算の能力という梟の翼では到底届き得ぬ永遠の国から，詩が光と火とを高く天翔けりもたらすことがなかったならば，云々[14]」と言い，*A Defence* の原形であった，Charles Ollier 宛に意図された（実際には出されなかった）書簡の断片に，「彼〔T. L. Peacock〕は，生命の『太陽』ともいうべき『想像力』を消してしまって，彼が『理性』と名づけた『月』の冷い当てにならぬ，しかも，借りものの光を頼りにして己れの道を手探り進もうとして，『月』の光が届かぬ暗い『時』の割れ目に躓いて転び，鷲ではなく梟として，彼の馴染みの薄暗い天の女王ともいうべき朧な天体を見るだけで目を眩ましてしまう[15]」という有名な言葉を残している。Donald H. Reiman と Peter Butter が指摘するように[16]，「時と有為転変」と関連をもつ「月」と違って，「太陽」

は生々とした創造的想像力，神，善の象徴として用いられており，この象徴は，*The Triumph of Life* で最も一貫して表われるのである。「太陽」や「鷲」が "the sacred few" に関係する象徴であるのに対して，"those deluded crew" に属する象徴は「月」，「梟」であり，更に，*The Triumph of Life* においては，猿，禿鷹，鷹，吸血蝙蝠，蚋，蠅などの動物である。Peter Butter の「*The Triumph of Life* では，動物の心象は堕落，肉欲，節制なき欲望を意味するように用いられている。このことは『俗世の車』の腐敗した追従者や彼らの仮面の記述において明らかにそうである」[17]という註釈は傾聴すべきであろう。

III

"The sacred few" と "those deluded crew" の対比の背景をなしている自然も，同様な対比関係において描写されているが，断片 *The Triumph of Life* においては，特に，「俗世」に関する自然の描写に重点がおかれている。Shelley は，「苔むす穴から美しい調べの飛沫を／永遠に吹き上げる泉水の音」，また，「森から，草の生えた道や大枝を拡げた楡と／冷たい洞穴の散在する森の芝地や，／優しい夢を育む菫の花咲く堤を／語り知らせる微風」(ll. 67-72) と「花の開かぬ道」(l. 65)，「夏の埃が一杯に舞い上っている／大道」(ll. 43-44) とを対照的に描いている。花と青葉を敷きつめた道も，夏の埃っぽい道も，Donald H. Reiman の言うように[18]，いずれも，「人生行路」を象徴している。この埃っぽい道を進む "those deluded crew" の行列—「俗世の凱旋行進」(the Triumph of Life) —は，ローマの凱旋行進の譬喩によって最も効果的に表わされており，そして，その効果は，dramatic irony の使用によって一段と高められるのである。類似した譬喩が残存する断片に二度現われる。先ず，詩の初めの部分で，激しい歌と狂乱の踊をしながら進む「無数の群衆」である "those deluded crew" の行列は，

「征服者の凱旋行進を
迎えるために帝国ローマが元老院，

フォーラム，劇場から人の波をあふれ出し，
歓呼をもって迎える時のようだった——
やがてはそれも自由な民への

首かせとなり，
その下に隷従することになるであろうに，
そうした凱旋行進に非常によく似ていた。」 (Ll. 110-118)

とあり，また，Rousseau の身の上話の初めの部分においても，Rousseau が「俗世」に身を委ねると間もなく，「俗世」の幻影が，同様に現われてくる。

「新しい姿とその冷い輝やかしい車は，
荒々しい音楽，耳をつんざく音楽をならして，森を横切り，

あたかも或る恐ろしい戦から勝ち誇って，
帰国した時の如くに彼女の星の運命を喧しい群衆が，
熱狂的に称えた。」 (Ll. 434-438)

そして，虹が凱旋門の如く，その上に現われたのであった（ll. 439-441）。浅薄な心の多くの者たちが，「俗世」によって魅了されるのは，「俗世」のもつ，このような皮相的な魅力である。しかし，ここに，勝利の行列という表面的な華やかさや喜びの裏には，更に，強大な奴隷的支配が続くという——実は，「悲しい行列」（l. 176）という——irony がある。そして，世界を支配したローマ帝国自体も他を奴隷とすることによって自らも奴隷となったように，「俗世」も多くを奴隷とすることによって，自らをも奴隷としてしまうのである。こゝに，今一つ別の irony があることに気づくのである。[19]

所で，「俗世の凱旋行進」の中央に車があり，車は，太陽を眩ます「白昼の光よりも烈しく，／しかも，氷のように冷いぎらつく光」（ll. 77-79）を発散している。"Those deluded crew" を誘惑し，縛りつけ，狂乱の踊りをさせているのは，この光である。群衆の「誰一人として／何処へ行き，何処から来て，何故／群衆の一人となっているのか知らないようだった」（ll. 47-49）。「新月のような」（l. 79）車から発散する，太陽を眩ます冷い光——これに当った者らを縛りつけ，たちまち不具にする光——とは，Donald H. Reiman が言うように，[20]「単なる理性」と考えられる。

さて，車の中央には，「才月によって不自由になった者」のように，女性の「姿」（ll. 87-88）が坐っている。彼女は，Rousseau によって，「俗世」（Life, l. 180）と呼ばれている。彼女の象徴について諸説があって，Peter Butter は "the lower Venus" (Pandemian Venus) であると言い，[21] I. A. Richards は Shelley はこゝで Milton の *Paradise Lost* の「死」（Death, II. 666-673）に言及していると考え，[22] Donald H. Reiman は，この「姿」は単に大道を目盲的に「旅して行く群衆の日常の愚かな世俗的な存在」を表わすのみならず，罪を犯した人々が陥る「破壊力」である，と言っている。[23] すなわち，彼女は，"the sacred few" が懐く神聖な幻影，若き Rousseau が見た想像的な理想的な「全く輝やかしい姿」（A Shape all light, l. 352）と対照的な存在を象徴していると考えられる。

黒頭巾をつけた不具な「姿」である，この「俗世」の車は，「驚異の翼をもつ一組の馬」によって曳かれている。車の馭者は四面の顔をもつが，四対の眼は目隠しされているので急飛する車を正しく操ることが出来ない（ll. 93-101）。この馭者が何を象徴しているかについて，従来から二説がある。C. D. Locock 以後の，Shelley の詩の編者の多くは，馭者は，前の年に完成された長詩 *Hellas* に現われる「世界の盲目の馭者である／運命（Destiny）」（ll. 711-712）と同じものと解釈した。[24] これに対して，Ellsworth Barnard は，馭者が「盲目の運命」を表わすことはあり得ず，悪い願望，卑しい迷信，腐敗した制度など（要するに俗世の姿によって体現されるすべてのもの）を受け入れたために盲目になり，未来を予見せず，過去，現在の意味を理解せぬ「人間の魂」である，[25] と反論している。Barnard に従って，Carlos Baker は，「俗世によって目隠しされ，俗世の車を正しく導く（中略）術をもたぬ詩人」，「予言と立法という努めに失敗した詩人」を表わしていると述べ，[26] また，King-Hele も，同じ立場から，馭者は「人類を正しく導く能力を与えられながらも，俗権のきらめかしい報酬に魅せられて，登る過程で自らの理想を忘れた者ら」である，[27] と言っている。Barnard, Baker, King-Hele が，馭者は単なる「盲目の運命」の象徴ではないという主張の根拠は，「もし，目隠しされなかったら，／それは現在，過去，未来の世界を洞察出来たろう」（ll. 103-104）という二行である。馭者は，本来ならば *A Defence of Poetry* に現われる Janus の顔をもち世界の「立法者」，「予言者」[28] となって，人生を正しく導いた筈で

あるが，「俗世」の強烈な光に目を眩まされてしまい，その奴隷となり，正しい能力を失った人間，ないし，能力そのもの——具体的に言えば，「本来は詩人であった」[29]が，「俗世」に心を奪われた Rousseau，ないし，彼の腐敗した精神のようなもの——ではなかろうか。そして，この馭者が操り，「驚異の翼をもつ一組の馬」に曳かれた，人間を轢き殺す「俗世」の車（ll. 79-95）の先例を，Shelley は Edmund Spenser の *The Faerie Queene* の Lucifera の車に見出したであろう[30]，とするのが通説である。

Ⅳ

以上，詩において，重点的に描写されている "those deluded crew" の進む「花の開かぬ道」，埃っぽい道と，彼らを虜にしている「俗世」を象徴する様々のもの——冷い光，車，「姿」，馭者など——を検討した。それでは，次に，"the sacred few" と "those deluded crew" とは，それぞれ，如何なる人間を表わしているかを調べよう。そして，そのために，*The Triumph of Life* において，"the sacred few" と "those deluded crew" とは，（1）Christ と Socrates 対晩年の Rousseau 他と，（2）若き時代の Rousseau 対晩年の Rousseau という，二重の対比によって例証されていると考えられるので，この対比を二つの部分に分けて取扱うのがよいと思う。

（1）

"Those deluded crew" は，夏の埃っぽい大道を「夕暮の薄明りの蚋のようにおびたゞしく」あちこちへと急ぐ「大きな流れ」（ll. 44-46）と言われ，また，車から発散する光を受けて「日光の中で踊っている塵の粒（atomies）のよう」である（ll. 446-447）と譬えられているが，この仲間の中には，アテナイの人（Socrates）やエルサレムの人（Christ）の姿は見られない。この二人によつて代表される "the sacred few" は，

「己れの魂を征服者に
屈することが出来ず，生命ある炎で
世界に接するやいなや

故郷の真昼の空へ翔け戻る鷲の如く翔けて行った。」　（Ll. 128-131）

人々であり，或は，「この世の権勢や財宝の王冠を／排した人々」（ll. 132-133）である。Edward E. Bostetter は，これらの "the sacred few" は，「自己否定」（self-denial），ないし，Keats の所謂「公平無私」（disinterestedness）をなし遂げた人々である[31]，と解釈している。彼らは，たとえ，一旦は俗世の汚れに触れようとも，「鷲」の如き想像力によつて把握される「愛」の導きに従って，そこから逃れ，遂に，自己認識に達した Prometheus の如き人々であろう。彼らは，また，「永遠なる愛」によって導かれた Dante の如き人々であるかも知れない。想像的「愛」に導かれる "the sacred few" には，「多くの魂が調和して一つになった魂」（*Prometheus Unbound*, IV. 400）が認められる筈である。

「〔Dante を〕地獄の最も底の深みから
天国のあらゆる段階，あらゆる栄光を通り，

愛が静かに導いた。」 (Ll. 472-474)

では，次に，Shelley が断片において最大の関心を払った "those deluded crew" の分類，人物確認，彼らが「俗世」の捕虜となった原因と悪の象徴を明らかにしよう。

夏の埃っぽい不毛の大道を "those deluded crew" は，目的もなく，「昔ながらの悲しい愚行を追い続けていた」(l. 73)。そこへ，例の氷のように冷い光を発する車が近づくと，この無数の群衆は「激しい歌と狂乱の踊りで」(l. 110) ますます激しく狂乱するようであった。注意して見ると，この「俗世」の車の前には，若い男女が，光によって引きつけられたり，跳ねかえされる蛾のように，離合集散を繰返しながら踊り狂い，疲れると，車に轢かれて倒れた。その後には，「大海の怒りが／荒れた海浜に砕けた後の泡のような痕跡さえも残らない」(ll. 162-164)。車の後には，「汚ならしく着た老人たち」が，衰えた体で気力なく，これも踊りながら，冷い光に追いつこうとするが，遂に「恐ろしい影が近づくと，遙か後方に残されて腐敗のなすがまゝに「塵」と化す。彼らは，「彼らの生まれ出た塵に倒れ，／腐敗は横わる彼らを覆う」(ll. 170-175)。Carlos Baker が言うように[32]，若い連中は，情熱的な感能的な愛を，老人たちは，精神的不能を象徴していると考えられる。

この若者や老人たちの側に，別の「虜囚の群」(a captive multitude) がいた。彼らは「すべて権勢の中に，また，不幸の中に／老いた人々」(ll. 119-121) であった。彼らは俗世の名声や汚名を育んだ人々である。

最初の幻の行列が消えると，直ちに Shelley は，道端に捨てられた衰れな姿の Rousseau の口を通して，"those deluded crew" の，更に細かい分類，個々人の人物確認を行う。彼らは，「知恵ある者，／力ある者，忘れ得ぬ者，／法冠と兜と王冠，或は，思想界の／王者の印たる光の冠をいただいた者たち」(ll. 208-211) である。"The sacred few" と対照的に，この "those deluded crew" は，「この世の権勢や財宝の王冠」(ll. 132-133) を求め，弄んだ人々で，「鷲」の想像力を捨てゝ「梟」の理性を選んだために，「彼らの知識は／彼らに己れを知ることを教えず／彼らの力も内なる反乱 (the mutiny within) を鎮めることが出来なかった」(ll. 211-213)[33]。冷い理性の光は「内なる反乱」(内なる激情) を調和させず，かえって，激情を煽り立てるので，この理性に身を委ねた彼らには，"the sacred few" に見られるような，想像力と「愛」(の知識) による，調和して「一つになった魂」は期待出来ない。

新たに見えて来た行列は，三つの群をなして進んで行く。①先ず，十八世紀の啓蒙主義の思想家や政治家—— Napoleon (権勢の掌握者)，Rousseau (名声の獲得者)，ロシアの皇帝たち (Frederic 大王，Catherine 女帝，Leopold など俗権の掌握者たち)—— の群が指摘される。大衆の喝采を受けたフランス革命は，恐怖政治や Napoleon の出現によって，大衆を完全に失望させてしまった。Shelley は，*The Triumph of Life* の一年前に，Napoleon を無秩序な不当な支配者として，「Napoleon の激しい精神は，／恐怖，血，黄金の中を，／彼の誕生から死への破滅の激流の中を流転した」("Lines Written on Hearing the News of the Death of Napoleon," 1821) と書いている。*The Triumph of Life* において，Napoleon は，歴史的な力によって山の高峰へ駆り立てられ，彼の前に登った登山者のように，高峰で目が眩み，世俗的破滅，道徳的隷属状態に堕落した。そして，Shelley を表わしていると思われる「詩人」は，「〔Napoleon の〕偉大な影が過ぎ去るのを見て，頬の色が変わるのを感じ，／彼によって掌握されたために巨大な世界も弱くなり，／どんな小人〔くだらぬ人間〕でも蹴とばせるほどとなった」のを見，支配者の「権力」と一般民衆の「意志」

とが「対立し合って，／現世の日々を支配する様を考えて」深く悲しみ，「神が善と善の手段を合致せぬもの／としたのは何故か」を思いめぐらした (ll. 224-231)。

②古代ギリシアの詩人，哲学者，政治家—— 一青年に対し不純な同性愛をした Plato の肉なりしもの[34]，Bacon が出るまで思想界を支配した Aristotle，俗世の支配者 Alexander，Homer とその仲間の詩人たち（恐らく彼らの肉なりしもの）—— も行列に加わっている (ll. 253-278)。*A Defence of Poetry* にあるように，Homer はもとより，Plato, Rousseau も本質的に詩人であった。しかし，彼らといえども，肉体が関係する日常生活では，「徐々なる世界の汚れ」（*Adonais*, XL）に穢されることは脱れ得ない。このことは，*A Defence of Poetry* に，「霊感の途切れた合間には（中略）詩人も常人となり，常に他の人々の生活に及ぼしている影響力の激しい逆流に身を任すのである[35]」とあり，「Homer は大酒漢，Virgil はおべっか者，Horace は臆病者，Tasso は狂人，Bacon 卿は公金横領人，Spenser は御用詩人〔の如きヘボ詩人〕だったとするならせよ。彼らの過失は，秤にかけてみてそれが塵にしか過ぎないことが分った。彼らの罪は『緋のようであっても，雪のように白くなるのだ。』『時』という中保，救済者の血で洗い清められた[36]」などと述べられている所から，「俗世」は，これらの詩人たちの肉体に関する過ちを許さず，容赦なく彼らの肉体であったものを捕虜としたと解釈されるべきであろう。すぐれた詩人（の肉体）さえも，"those deluded crew" に加わっている所以である。

③続く群の中には，ローマ時代から中世の暗黒時代の俗界の支配者——Caesar から Constantine までのローマの皇帝たち——，宗教界の支配者——Gregory とか John の称号をもつローマの法皇たち——もいる。この中で後者，キリスト教制度の確立者たちは，「人間と神の間の影」のように立ちはだかり，「真の太陽」（こゝでは Christ の説いた「愛」の教理を表わす）を曇らし歪めて，「その日蝕」である彼らの宗教を世界の崇拝の対象としてしまった (ll. 282-292)。これは，*A Defence of Poetry* で，「愛」の宗教を開いた「〔Christ の〕教理はたちまち歪められてしまったように思われる[37]」とか，*Prometheus Unbound* の主人公 Prometheus の「汝が御名は言うまい，それは呪いとなってしまった」(I. 603-604) という嘆きに見られるように，晩年の Shelley の，Christ の教理に対する敬虔の念とその後のキリスト教制度に対する疑惑や絶望の念とに一致するものである。

フランス革命の挫折，Christ の「愛」の教理の誤解や濫用から生じた迷信，搾取，戦争は，Shelley を表わすと考えられる「詩人」が "those deluded crew" に関して懐いた「悲しい思い」(l. 299)——これは，「詩人」を前夜眠らせなかった「語れぬ思想」(l. 21) と同じで，Wordsworth の「悲しい思い」("Ode : Intimations of Immortality," l. 22) を思い出さすものである——の中の最も悲しい思いであった。

「わたしの眼は人々のこうした絶えまない流れに病み，
心は一つの悲しい思いに痛む。」 (Ll. 298-299)

このような「善と善の手段」，善と善の動機の不一致 (ll. 230-231) という現世に対する絶望的な洞察は，*Prometheus Unbound* の第一幕で，人間社会の悪（主として，Christ の教理とフランス革命の誤解に起因する悪）を暴露する最後の Fury のセリフに通じるものがある。

「善なる者は力を欠き，ただ無益な涙にむせぶのみ。
力あるものは善を欠く，この方が遙かに害あり。
賢い者は愛を欠く，愛ある者は賢さを欠く。
かように，すべて最善のもの，混乱して悪となる。」　　(I. 625-628)

Fury のこの言葉によって Prometheus が最大の苦痛を受けたように，*The Triumph of Life* の「詩人」も，「善と善の手段」の不一致の見せ物によって耐え難い苦痛を味わったのである。

(2)

"The sacred few" と "those deluded crew" の今一つの対比は，「本質的に詩人であった」と註され，また別の所で，現代人の中で思想・感情の両面で Christ に最も近い哲学者[38]と称えられるほどの Rousseau と，想像力を捨て理性を選んだ結果，「俗世」の車につながれ，不具となり，生の活力を消耗して倒れ「老木の根」の如くなった Rousseau[39] との対比において表わされている。

Rousseau は，「四月も盛り」(the April prime, l. 308) の頃，忘却の河が貫流する山の洞穴の側に目覚めた。このことは，Carlos Baker や Donald H. Reiman などが主張するように[40]，Wordsworth の "Ode : Intimations of Immortality" を連想させる「Rousseau の誕生の象徴的表現」であろう。森の中には，「普通の『太陽』が／普通の『大地』に放つよりも神聖な光」(ll. 338-339) がゆきわたり，忘却の妙なる音楽が充満していて，それを聞く者は，すべて，この世の一切の苦楽，一切の愛憎を忘れる。Rousseau も前世の記憶が全くない (ll. 341-335)[41]。この頃の Rousseau の精神状態は，*Alastor* の主人公の「詩人」が経験したような，「外界の荘厳さと美しさが，彼の思想の組織の中に深く沈みこみ，その思想の変化に対して尽きることのない多様さを与える」[42]精神状態に類似している。この神聖な驚異すべき自然の中に，"a silver music" (l. 355) に伴われ「太陽の光に包まれた」女性の「全く輝やかしい姿」が絶えず自分の前にあるのを，Rousseau は認める。この「姿」は，W. B. Yeats によって「暁の明星」[43]，Carl H. Grabo によって "Uranian Venus"[44] (the higher Venus) などと同一視されているが，彼女は，「太陽の光に包まれ」ており，太陽の光の水面に映ったものである (ll. 348-352) ところから，「太陽」のこの世への現われ，Shelley が見た「理想美」，ないし，「愛」の化身と考えるべきであろう。彼女は，Peter Butter が言うように[45]，「この世における永遠の美の姿」であり，King-Hele が言うように[46]，「高い存在者と神秘な交渉をもつと考えている人々によって見られ感じられる本質的なもの」であり，同時に，「高い理想を懐いている人々を導く光明」を意味していると思われる。

しかし，*Alastor* の主人公のように，Rousseau は，間もなく，こうした自然との交渉に飽き足らなくなる。このようにして，Rousseau は，その生涯の危機を迎え，これが契機となって，彼は，これまでの "the sacred few" の一人としての生涯から "those deluded crew" の一人としての悲劇的生涯に移って行く。彼は眼前に立っている「全く輝やかしい姿」に，自分が何処から来たか，何処に居るのか，何故に居るのか (l. 398) と尋ねる。すると，彼女は，「立ち上って汝の渇きを鎮めよ」と言い，Nepenthe (ネペンシー) の入っ

た水晶のコップを差し出した。Rousseau が，そのコップに唇を触れると，「たちまち〔彼の〕頭脳は砂のようになった」(ll. 395-405)。そして，今まで見えていた「美しい姿」は消えて (l. 412)，これに代って「俗世」の幻影が現われた。彼は「俗世」の「冷い輝やかしい車」(l. 434) にすい寄せられるように近づき，「俗世」の支配下に入ったのであった。Rousseau は，当時の恐るべき出来事を次のように回想している。

「この俗世の慌しい嵐の

荒れ狂う動乱の中に，わたしはとびこみ，
自分の胸を冷い光に曝したが，
この光にはたちまち人を醜い不具者にする作用があった。」　(Ll. 465-468)

Rousseau の生涯の転換点をなすこのあたりの詩行は，極めて重要であり，しかも難解であるために，従来から様々な解釈や憶測が試みられた。先ず Nepenthe の象徴の理解の仕方に問題がある。Nepenthe とは，伝説上，草の名，または，その草から採った薬で，俗世の憂さを忘れさす効能があると伝えられ，一説には，阿片とも言われる。Shelley の *Prometheus Unbound* では，これは極楽に咲く，愛と希望の花である (Ⅱ. iv. 59-65, 160-163)。W. B. Yeats は *The Triumph of Life* の Nepenthe を「忘却と愛」の薬[47]と考える。Nepenthe をこのような妙薬とし，その薬の入ったコップを差し出した「全く輝やかしい姿」を，前述のように，「理想美」，「愛」，想像力の象徴たる「太陽」と同質のものと解釈すれば，可能な意味は，Carlos Baker や King-Hele の言うように[48]，Rousseau は「全く輝やかしい姿」の差し出したコップに唇を触れただけで，力が尽きて，結局は，中身を飲まなかった，そのために，彼はたちまち俗世の影響を受けた，ということになる。これに関連して，Walter Edwin Peck は，Rousseau は想像力を捨てゝ理性を選んだと言い[49]，Neville Rogers は，「Rousseau は唯物論で腐敗された」[50]と書いている。そして，Peter Butter による「*Epipsychidion* の詩人は，難事や過ちにもめげずに，彼の〔理想の〕追求を続けるが，*The Triumph of Life* の Rousseau は，肉欲的な群衆の仲間にとびこみ，初期の理想を見失うのである」[51]という解釈も，Peck や Rogers と同じ見地からなされたものであろう。

それでは，「愛」の妙薬である Nepenthe を飲まないことが，何故，不幸の原因となるのか。①既にみたように，"those deluded crew" が「俗世」の虜となつた根本原因は，「彼らの知識は／彼らに己れを知ることを教えず／彼らの力も内なる反乱を鎮めることが出来なかった」(ll. 211-213)[52] ためであった。この詩行は，彼らは，豊かな想像力でもって内なる魂を眺めて己れを知り，すべてを調和さす「愛」を知ることがないため，「内なる反乱」（内なる激情）を鎮める能力をもたなかったと解釈される。② また，Rousseau 自身も自分の悲劇的畸形の原因を次のように回顧する。

「天がわたしの魂を燃やすに用いたあの火花が
もし，より純粋な糧を与えてくれたなら，

腐敗が今ほど，かつての Rousseau であったものに
とりつくことなく――また，この仮装が
それを装うことを軽蔑するものを汚すことはなかったろう。」 (Ll. 201-205)

この引用中，「より純粋な糧」とは，「それ〔「この仮装」のこと〕を装うことを軽蔑するもの」（恐らく，Rousseau の精神，感情，感受性のことであろう）に対して「天」によって与えられる精神の想像的作用，換言すれば，「愛」を発見して「内なる反乱」（内なる激情）を鎮める能力を意味し，また，「この仮装」とは，「俗世」の悪の腐敗力を表わしているのであろう。こゝで，上の二つの引用を合わせ考察すると，Nepenthe を飲まなかった Rousseau が，不幸になった原因は次のようになろう。つまり，Rousseau は，天から来た「全く輝やかしい姿」が差し出した Nepenthe，すなわち，「愛」を受けいれるに十分な想像力をもたなかったために，ないし，想像力を捨てたために，「愛」の知識が得られず，「愛」によって「内なる反乱」（内なる激情）を鎮めることが出来ず，逆に，その「反乱」によって駆り立てられて，「俗世」の腐敗力の犠牲となってしまった，というのではなかろうか。

所で，若い Rousseau が，「俗世」に腐敗されたという，この思想は，Shelley の思想の遍歴を述べた "On Life" というエッセイに述べられている（Wordsworth の "Ode: Intimations of Immortality" に告白されている信仰に近い）思想の詩的表現であろう。その "On Life" に次のようにある。

「子供時代の感覚をふりかえって見よう。われわれは何とはっきりした強烈な把握力を世界や自分自身についてもっていたことか。社会生活を取り巻いている多くのものは，今では重要でなくなったが，当時，われわれには重要であった。（中略）当時，われわれが見るもの，感じるもののすべてと，われわれ自身とを区別する習慣は少なかった。それらは，いわば，一つの塊りをなしていたように思われた。こういう意味で，いつまでも子供のまゝでいる人が幾人かはいる。幻想と呼ぶ状態に陥り易い人々は，あたかも自分自身が周囲の世界に融けこんでいるかのように，もしくは，周囲の世界が自分自身の中に吸収されるかのように感じる。彼らには，その区別がない。そして，こうした状態が，異常に強烈で，生々とした人生の把握に前後して伴う状態である。人間が大人になるにつれて，こうした能力は通常失われ，人間は機械的な習慣的な動物となってしまう。[53]」

換言すれば，世俗的な生活に馴れ親しむ間に，「日常性の靄（the mist of familiarity）が，われわれの存在の驚異をわれわれから見えなく隠してしまう[54]」のである。この「靄」とは，*A Defence of Poetry* において，「日常性の薄膜」，「人生の黒いヴェール」，また，「われわれを取り巻く偶然なる印象に無理やりにわれわれを縛りつける呪[55]」と呼ばれているものであって，真実の人生に対する偽りの人生の譬喩である。

こゝで再びテキストに戻ると，Rousseau が，「荒々しい音楽，耳をつんざく音楽」をならしてやって来る「新しい姿とその冷い輝やかしい車」(ll. 434-435) から発散され，人を誘惑し，乱舞させ，「たちまち人を醜い不具者にする作用」をもった冷い光の支配下に入ることによって，すなわち，"those deluded crew" の仲間に加わることによって，彼の神聖

であるべき誕生も，今や，「恥じ呪うべき誕生」（*Adonais*, LIV）となった。かくして，

「その日が暮れるよりずっと前に
天の光の如く，忘却の谷に眠れる者を目覚した
あの喜びは消えた。」 (Ll. 537-539)

この嘆声は，Wordsworth の，若い頃自分を導いてくれた「美しい幻影」が「普通の日の光」の中に消えて行くのを知る，という，また，「かつてあれほど輝やかしかった光が／今やわたしの目から永久に奪われた」("Ode : Intimations of Immortality," ll. 75-76, 179-180）という，大人の悲しみと一致するものである。今や，Rousseau は，「この世を徐々に穢す汚れ」（*Adonais*, XL）に抗し得ず，「俗世」の「物凄い舞踊」（l. 540）を舞う間に疲れて，急速に「生きながらの軀」(the living sepulchre)[56] と化した。哀れな不具な Rousseau の姿は，次のように描写される。

「(おゝ天よ，かゝる悲惨を哀れみたまえ！)

山腹から歪に曲りくねって生えている
老木の根と思っていたものが，
実はあの迷える者らの一人であり，

広い白い葉を垂れていると見えた草が，
その男の色褪せた薄くなった頭髪であり，
空しく隠そうとした穴が

かつて眼であったものであることを
知った。」 (Ll. 180-188)

"The sacred few" と子供たちとに認められる鋭敏な感受性，ないし，想像力を腐敗させ，破壊させる「俗世」の仮借なき力の信仰は，*A Defence of Poetry* においても，ギリシアの感能的な詩人たちと，Homer や Sophocles とを比較した条に見られる。それによると，感能的な詩人の不完全さは，彼らが詩人であったからではなくて，詩人でなかったからであり，そのために，彼らが，彼らの時代の腐敗と係りをもったからである。もし，この腐敗が，彼らのすべての感受性を消滅してしまったならば，その「悪の最後の勝利」を勝ち得たであろう，とある。何故ならば，社会の腐敗は，あらゆる歓びに対する感受性を破壊せずにはおかぬからである。すなわち，腐敗は，芯である想像力と知性に始まり，やがて，「麻痺さす毒」のように体一面に拡がり，情愛を経て欲情にまで達し，遂には，全身を殆んど感覚のない「鈍い肉塊」としてしまうのである。[57] *The Cenci* において，Shelley が，「愛」を無視した女主人公 Beatrice が犯した「道徳的誤謬」に基づいた悲劇を創作することを意図したと見做せるならば，この悲劇的な詩においても，彼は同じことを試みたと言えよう。

V

Peter Butter は，「*The Triumph of Life* の終りは，精神の堕落，体現，野獣化，人間の水準以下への零落の素晴らしい想像的絵図である」[58] と批評している。成るほど，"the

sacred few" と "those deluded crew" の二重の対比が，Rousseau が後者の群に加わることによって一本化されると，直ちに，Shelley の関心は，"those deluded crew" を中心とする「俗世」の悪の種々相の暴露とそのおびたゞしい見事な象徴的な描出に集中してくる。言うまでもなく，*The Triumph of Life* の初めから，「夏の埃が一杯に舞い上っている／大道」を急ぐ「俗世」とその犠牲者たちは，「夕暮の薄明りの蚋のようにおびたゞしく」(ll. 43-46)，普通の「日光の中で踊っている塵の粒のよう」(ll. 446-447) であり，また，「渦巻き流れる洪水の上の泡のよう」(l. 458)[59] であると，様々な譬喩で表現されて来た。「蚋」，「泡」，「塵」のいずれも，Donald H. Reiman が「蚋」について述べたように，[60]「はかない無意味な生活」を送る者の象徴であろう。そして，「夕暮」とは，Shelley が *The Triumph of Life* で用いたライフ・サイクルの規則から言えば，耄碌，ないし，老衰を象徴しているのではあるまいか。[61]

Rousseau が，「俗世」とその「冷い輝やかしい車」，そこから発し，人を不具にする，冷い輝やかしい光，人を乱舞させる，荒々しい，「耳をつんざく音楽」の影響下に身をおとし，"those deluded crew" に加わると，間もなく，この行列は，恐ろしい異変に襲われた。

「車が，神秘な谷の向うの急勾配を
登り始める前に
〔Dante の〕詩に適わしい驚異を見た……
（中略）
……森は

一番奥まった処まで影で一杯になり，
大地は，灰色の幻影で覆われ，空気は，
薄黒い姿で充ちた。譬えれば，

吸血蝙蝠の大群がぎらつく熱帯の太陽の前に飛び交い，
夕方にもならぬのに
或るインドの島に不思議な夜をもたらす時のようだった。

そのように幻影はあたり一面はびこった。」　(Ll. 469-487)

Dante の詩に適わしい，地獄さながらの人生の暗黒な状態が来た。Donald H. Reiman によって，「世界の象徴」[62] と考えられた森は，灰色の幻影で薄暗くなり，これらの幻影は，「吸血蝙蝠の大群」のように，「太陽」（真実なるもの，「愛」の象徴）を暗くする。人々は絶えず自分の影を投げ出す。すると，その影を，「俗世」の車が発する光が様々な幻影に変える。或る者は妖精（迷信深い者の象徴）の如く，或る者は猿や禿鷹（俗権や教権の掌握者の象徴）の如く，或る者は蚋や蠅（世俗的法律家，政治家，牧師，理論家の象徴）の如くである。このような，群衆の発する影のおびたゞしいことは，人生も終りの「秋の夕方」にポプラの木から吹きちぎられる枯れ葉のようであると譬えられる (ll. 526-529)。これは，Rousseau の目覚めが，「四月も盛り」の「夜明け」で，「普通の太陽」よりも神聖な光と美しい調和の音楽に伴われていたのと顕著な対照をなしている。Peter Butter は，「〔「俗世」の追従者が〕発散している影や仮面は，彼らが何に変身しつゝあるかを示している。悪は，彼らの内部から生じるのであって，外からおしつけられているのではない」[63] と註釈

している。このように，Shelley は，悪の根源を主として外的諸制度，慣習などに求めた初期の速断から，その根源は主として人間の精神内部にあるという究極的結論に達した。

更に，Shelley は，人生の末期の象徴的描写を続ける。「仮面は次々にすべての顔から／姿から剝げ落ちた」(ll. 536-537)。人々は，影を発散する間に，力尽きてしまう。

「間もなく，
すべての形から美が徐々に衰え，

最も丈夫なすべての手足や最も美しいすべての顔から
力や生気が失せ塵の如くひからび，
その姿や行為は生の美を

失なう。」 (Ll. 518-523)

しかも，

「その姿から大方の影が発散し
力と美とが殆んど残らぬ者らが一番早く。」 (Ll. 542-543)

である。すなわち，夏の埃っぽい道路を行く「俗世」の追従者たちは，世俗的価値の追求の間に，生の活力と美とを空しく消耗し尽して，遂に，「塵」，「泡」としてはかなく滅び，或は，Rousseau のように，「老木の根」と見間違うような哀れな不具者として道端に捨てられる。そして，世俗的価値の追求に熱心だった者ほど，早く，悲劇が待っているのである。

VI

Shelley は，不慮の死のために，*The Triumph of Life* を完成しなかったが，彼は，"those deluded crew" の悲劇的な最期を描写した後，"the sacred few" の，「愛」が導く静かな調和ある生活，（「耳をつんざく音楽」の代りに）"a silver music" (l. 355) の世界を描写する筈であったと推測される。

"Happy those whom the gold
Of——" (Ll. 547-548)

こゝに言及されている，幸福であった，幸福である，ないしは，幸福となるであろう人々は，"the sacred few" と同一であると考えてよかろう。詩はこゝで中断されている。[64] Walter Edwin Peck は，"Of" に続く筈の，書かれなかった部分を，この詩の258行と259行に関連させて，「愛によって支配されているが故に，この世の黄金，苦痛，老齢，怠惰，隷属が誤らせたり，征服したり出来ない人々は，幸福である」[65]と補って読んでいる。Neville Rogers も，Peck と同様に，こゝに言及されている人々とは，「〔黄金や血で〕穢されなかった人々」[66]である，と説明している。要するに，幸福な人々である "the sacred few" とは，魂の「内なる反乱」を鎮める調和の「愛」の宗教の信者であり，「愛」に導か

れ，「俗世」の余りにも強烈な光の誘惑に屈せず，あくまで初期の理想を追求した人々であろう。

この「愛」の必要性の主張は，円熟期の Shelley の作品に共通して見られるものであって，特に，*The Triumph of Life* に限られたものではない。例えば，*Prometheus Unbound* において，Prometheus は「愛がなければすべての希望の空しいことを思い」(I. 807-808)，Demogorgon は「〔運命や時間や幸運や偶然に〕／永遠なる愛以外のすべてのものが服従している」(Ⅱ. iv. 119-120) という宇宙の神秘を説いており，動乱と混乱の慌しい世界を描いた *The Revolt of Islam* において，「愛は，道徳的世界を支配する唯一の法則として，到る処で，称えられている。」[67] そして，Shelley は，この最後の長詩 *The Triumph of Life* においても，「耳をつんざく音楽」，冷くぎらつく光の中で踊り狂う群衆，屍と塵と泡の混沌とした「俗世」の象徴的な描写の中に，愛以外のすべてのものが変化するという，同じ物語を語ろうとしたのであろう。図らずも，Shelley が，*The Triumph of Life* において，*Divina Commedia* における Dante の意図として要約した次の詩行は，取りも直さず，*The Triumph of Life* における Shelley の意図の要約でもあり，この詩の解釈の鍵であると考えられよう。

「〔Dante を〕『地獄』の最も深い深淵から
『天国』のすべての圏，すべての栄光の階段を通って
『愛』は静かに導いた，そして彼は

『愛』を除くすべてのものが変化する驚異すべき物語を，
憎悪と畏怖の言葉で語るべく帰って来た。」　(Ll. 472-476)[68]

恐らく，Shelley は，「俗世の凱旋行進」という大きな外殻を Petrarch によって示唆されたであろうけれども，「愛」の主張においては，主として，「Petrarch 以上に愛の秘義を理解した」[69] と彼が断言した Dante に従って，"those deluded crew" の関係する「俗世」の悪と悲劇の原因は，すべて，想像力によるこの「永遠なる愛」の永続的な把握の失敗にあるのだ，と説こうとしていると思われる。

Ⅶ

以上見たように，断片 *The Triumph of Life* において，"the sacred few" と "those deluded crew" との二つの型の人間を対比さすことによって，Shelley が意図したことは，真の生活を営むためには，理性ではなく，「道徳の大きな秘密」である「愛」とこれを発見する想像力が必要であることを読者の想像力に馴染ますことではなかったであろうか。内なる魂――「それは運命の書である」(*The Revolt of Islam*, VIII. xx. 3)――を見つめて，すべてを調和さす，真実にして「永遠なる愛」を発見する想像力を捨てゝ，人生問題を解決しようとした者は必らず失敗した。何故なら，「彼らの知識は，／彼らに己れを知ることを教えず，／彼らの力も内なる反乱を鎮めることが出来ず，／自分の心に描いた真理の夜明けではなく，深い夜が／夕暮が来る前に彼らを虜にしてしまった」(ll. 211-215)[70] からである。要するに，「愛」の理念に到達する想像力なしには，人は，精神の「内なる反乱」(内なる

激情）を鎮めるどころか，かえつて，この「反乱」によって駆り立てられ，「俗世の凱旋行進」(the Triumph of Life) に加わり，「昔ながらの悲しき愚行を追い続け」(低俗な欲望に身を任せ)，たちまちの間に心身を汚し消耗してしまうからである。[71] *The Triumph of Life* の "those deluded crew" が犯した，想像力と「愛」を捨てるという，この「道徳的誤謬」が，*The Cenci* の Beatrice の場合と同様に，Shelley においては悲劇を生むのであろう。Christ と Socrates と若き Rousseau によって代表される "the sacred few" を除けば，十八世紀の啓蒙時代の思想家 (Voltaire, 晩年の Rousseau)，政治家 (Napoleon, Frederic 大王)，古代ギリシア時代の思想家 (Plato の肉なりし部分，Aristotle)，詩人 (Homer〔の肉なりし部分〕)，ローマ時代から中世の暗黒時代の政治家 (Caesar, Constantine)，法皇 (Gregory, John) は，みな，「俗世の凱旋行進」に加わった「俗世」の腐敗力の悲劇的犠牲者であった。

Shelley は，Rousseau の悲劇的生涯を例として，彼が「俗世の凱旋行進」に加わり，"those deluded crew" の一人として，無益に滅んで行く様子を見事な象徴によって描写する。Rousseau は，「普通の『太陽』が／普通の『大地』に放つよりも神聖な光」がさしこみ，妙なる忘却の音楽がゆきわたっている森に目覚め，眼前には，「太陽の光に包まれた」「全く輝やかしい姿」(「理想美」，「愛」の象徴) を絶えず見ていた。しかし，彼は，間もなくこの状態に飽き足らず，想像力を捨てゝ理性を選ぶと，彼が以前に見ていた「姿」は消えた。それに代って，「俗世」の「新月」(月は理性の象徴) の如き「冷い輝やかしい車」が近づいて来た。彼は，たちまち，この「車」から発散する，太陽も眩ます「氷のように冷いぎらつく光」によって引き寄せられてしまった。こうして，「俗世」の虜となり "those deluded crew" の一人となった彼は，他の仲間たちと同様に，「車」から発散する光の作用によって不具にされ，以前耳にした優しい天来の "a silver music" の代りに，「耳をつんざく音楽」にさそわれ，狂気の「物凄い舞踏」を舞う間に疲れ果て，捨てられ，悲惨な姿になった。

「鷲」によって象徴される "the sacred few" に対して，晩年の Rousseau を含む，「俗世」の「車」につながれた "those deluded crew" は，猿，禿鷹，鷹，蚋，蠅など (人間精神の世俗化，野獣化，無常化，脆弱化の象徴) の様々な影や仮面を放出するものとして描かれる。そして，彼らの中で，「内なる反乱」(内なる激情) により，より激しく駆り立てられ，このような影や仮面をより多く発散し，生の活力と美とをより早く失った者ほど，早く滅びた。このように，断片 *The Triumph of Life* において，ローマの凱旋行進に比べられる「俗世の凱旋行進」の譬喩は，外見上の華やかさ・楽天主義とは逆の，悲劇と悲観主義の意味を内に含むものとなっている。

最後に，断片 *The Triumph of Life* とそれ以前の Shelley の詩との大きな相違として，Peter Butter が言っているように，[72]「この詩は，暴政に対する初期の金切声の非難よりも，詩的により高い水準にあるのみならず，悪の権力に対するより現実的な把握を示している」ことがあげられよう。確かに，この詩は，多様な悪の把握の真実さと確かさ，それら悪の動的な象徴的な表現などの諸点において，*Queen Mab*, *The Revolt of Islam*, *Prometheus Unbound* の第一幕，*The Cenci*, "The Sensitive Plant" などの詩よりもすぐれていると言えよう。[73]

(昭和43年9月19日　受理)

註

(1) 特に註を施さない限り，この拙稿に用いた *The Triumph of Life* のテキストは，Thomas Hutchinson 編，Oxford の標準版，*The Complete Poetical Works of Percy Bysshe Shelley* (London, 1952) である。

(2) Peter H. Butter は，*The Triumph of Life* について，「詩全体は，一方，美しい日光の輝やく場面（中略）と，他方，車から発する荒々しい光を取り巻く不毛の埃つぽい荒地との対照の上に成り立つている」ことに注目している。Peter H. Butter, *Shelley's Idols of the Cave*(Edinburgh, 1954), p. 59. この対比は，これから問題にしようとしている "the sacred few" と "those deluded crew" との対比と照応する。尚，こゝで，Richard Harter Fogle が，Sheley の象徴の特性についてなした註釈を参照したい。「Shelley の象徴は，彼の真理－想像力によつて追求される詩的真理－の探求を表わしている。（中略）彼の最も特徴あるイメジュリーは，有限者と無限者との間の関係を確立せんとする試みを具体的に表わしている。（中略）この有限－無限の関係が Shelley のイメジュリーの焦点であると主張しても言い過ぎであるとは思わない。Shelley は，知的には，a Monist だけれども，情緒的に，また，本能的には，a Dualist である。彼は，この両の極を妥協させようと絶えず試みているが，必らずしも十分に成功していない。」Richard Harter Fogle, *The Imagery of Keats and Shelley : A Comparative Study* (Chapel Hill, 1949), p. 229.

(3) Stephen Spender は，円熟期の Shelley の意図に反して，*The Triumph of Life* や *Prometheus Unbound* を *Queen Mab* と同じ「教訓詩」のグループに入れた。Stephen Spender, *Shelley* (London, 1952), p. 32.

(4) Hutchinson, ed., *op. cit.* p. 14.

(5) Frederick L. Jones, ed., *The Letters of Percy Bysshe Shelley* (Oxford, 1964), Ⅱ, 412.

(6) John Shawcross, ed., *Shelley's Literary and Philosophical Criticism* (London, 1932), pp. 54－55.

(7) *A Defence of Poetry* : *ibid.*, p. 131.

(8) "On Life" : *ibid.*, p. 52.

(9) *A Defence of Poetry* : *ibid.*, pp. 155－156.

(10) *Ibid.*, p. 131.

(11) *Ibid.*, pp. 150－151.

(12) *Ibid.*, pp. 151－152.

(13) しかし，後で述べるように，Shelley は殆んどの人々，詩人さえも，想像力の途切れた瞬間における世俗生活の欠陥のため，彼らの肉体的な部分を「俗世」の車につないでいる。

(14) Shawcross, ed., *op. cit.*, p. 153.

(15) To [Charles Ollier], Editor of *The Literary Miscellany*, [early March, 1821] : Jones, ed., *op. cit.*, Ⅱ, 273.

(16) Donald H. Reiman, *Shelley's "The Triumph of Life" : A Critical Study* (Urbana, 1965), pp. 14－15, 23 ; Butter, *op. cit.*, pp. 145－146. W. B. Yeats は，Shelley は太陽を，光が愛に変わる時の「太陽の体現」として Emilia Viviani の特別な美しさを記述するのに用いた以外には，それほど親しみある目で見なかつたと言つている。W. B. Yeats, "The Philosophy of Shelley's Poetry" (1900) : *W. B. Yeats : Essays and Introductions* (London, 1961), p. 93. しかし，太陽は，Yeats が想像する以上に，Shelley にとつて重要な象徴であつて，唯一回の例外（"Letter to Maria Gisborne," ll. 154－160）を除けば，Shelley は，彼の詩において，「太陽」を軽蔑的な意味で使用したことがなかつた，という Reiman の見解は正しい。

Reiman, *op. cit.*, p. 66.

(17) Butter, *op. cit.*, p. 70.

(18) Reiman は,「大道」は実際の道ではなく,「多数の人々が選んで進んで行く人生行路」を,「小川」は「特定の個人の人生行路」を,「大河」は「特定の社会の歴史」を意味していると言つている。Reiman, *op. cit.*, pp. 26−27, 13. 同様に, Butter も,「*Alastor* と *The Triumph of Life* におけるように, 流れは人生行路を象徴している」と述べている。Butter, *op. cit.*, p. 66. Shelley は,「人々の大きな流れ」(a great stream / Of people, ll. 44−45),「人間の永遠の流れ」(perpetual flow / Of people, ll. 298−299) という語句も用いている。

(19) See *A Defence of Poetry* : Shawcross, ed., *op. cit.*, pp. 151−152 ; Reiman, *op. cit.*, p. 33. 「悪に仕えるすべての霊は奴隷である」(*Prometheus Unbound*, Ⅱ. iv. 110) という, Shelleyの考えと, *The Triumph of Life* が Petrarch の *Trionfi* の筋に従つて完結される予定であつたという推測から,「俗世の凱旋行進」の象徴には, 二重の irony が含まれていることになる。すなわち, 一つには, 外見, 華やかに見える行進に一度身を委ねた人々の究極的な敗北と, 二つには,「俗世」自身の勝利さえも, 続く何ものかの勝利, 恐らくは「愛」の勝利によつて敗北されるという意味があるのではなかろうか。この後者の irony に関する, Butter の説明は一読すべきであろう。「*The Triumph of Life* は, 一見した所, Shelley が以前に説いた多くの思想の否定であるように見える。が, それは断片であることを思い出さねばならない。その形式は Petrarch の *Trionfi* によつて示唆されたもので, Petrarch では, すべての行列の征服者は, 次の行列の征服者によつて順次屈服される。『俗世』の, すなわち, 欲望の凱旋行進だけで多分終るようなことはなく, 俗世は,『愛』(the higher Venus),『善』, ないしは, そのようなものによつて屈服されたのであつたろう。(中略) 断片としての *The Triumph of Life* は 'a paradox' の一方を表わしているのである。」Butter, *op. cit.*, pp. 30−31. 従つて, もし, かりに, Shelley がこの詩で究極的には「現在の苦悶に対する『人間』の勝利」を示そうと意図したにせよ, King-Hele がしたように, "The Triumph of Life" という題名そのものがもつ快活な楽天的な調子からだけで, 作者の意図をそのようなものであろうと推断することは, 性急ではなかろうか。See Desmond King-Hele, *Shelley : The Man and the Poet* (New York, 1960), p. 350.

(20) Reiman, *op. cit.*, p. 31.

(21) Butter, *op. cit.*, pp. 16, 30.

(22) I. A. Richards, *Principles of Literary Criticism* (London, 1955), p. 217.

(23) Reiman, *op. cit.*, pp. 29−30.

(24) *Ibid.*, p. 31.

(25) Ellsworth Barnard, ed., *Shelley : Selected Poems, Essays, and Letters* (New York, 1944), p. 492.

(26) Carlos Baker, *Shelley's Major Poetry : The Fabric of a Vision* (Princeton, 1948), pp. 260−261 & n.

(27) King-Hele, *op. cit.*, p. 351.

(28) Shawcross, ed., *op. cit.*, p. 124.

(29) *Ibid.*, p. 150 n.

(30) See, *e. g.*, Baker, *op. cit.*, p. 260 ; King-Hele, *op. cit.*, pp. 357−358 ; Reiman, *op. cit.*, pp. 31 n−32 n. *The Faerie Queene* の車は六頭の獣によつて曳かれ, その獣の蹄にかゝつて「堕落した人生を送つた人の死んだ頭蓋骨や骨などは, ／微塵に散らされ横たわつた」(I. iv. 18 & 36) とある。

(31) Edward E. Bostetter, *The Romantic Ventriloquists : Wordsworth, Coleridge, Keats,*

Shelley, Byron (Seattle, 1963), p. 190.

(32) Baker, *op. cit.*, p. 260.

(33) この引用において，特に，Reiman のテキストによつた。Reiman, *op. cit.*, p. 164. Hutchinson の Oxford 版では，「内なる神秘」(the mystery within) となつている。Hutchinson, ed., *op. cit.*, p. 512.

(34) Peter Butter は，この詩行が，Plato が Aster という青年を愛した逸話に基づくことを指摘している。Butter, *op. cit.*, p. 30.

(35) *A Defence of Poetry* : Shawcross, ed., *op. cit.*, p. 157.

(36) *Ibid.*, pp. 156－157.

(37) *Ibid.*, p. 141.

(38) *Essay on Christianity* : Shawcross, ed., *op. cit.*, p. 110.

(39) この解釈は，Walter Edwin Peck によつている。Walter Edwin Peck, *Shelley : His Life and Work* (London, 1927), Ⅱ, 276. Bostetter は，詩の前半で他の人物と屢々自らを比較する Rousseau と，後半に身の上話をする Rousseau とが同一でないことを興味深く指摘している。しかし，その内容に関しては，賛同しがたい。See Bostetter, *op. cit.*, pp. 324－325.

(40) Baker, *op. cit.*, pp. 265－266 ; Reiman, *op. cit.*, pp. 60－61 ; Glenn O' Malley, *Shelley and Synesthesia* (Northwestern Univ., 1964), p. 81 ; Butter, *op. cit.*, p. 193 n. このような解釈に対して，Bostetter は，これは，Keats の "Ode to a Nightingale" に見られるように，「夢みていた理想界へ〔Rousseau と Shelley が〕入つたことの象徴的表現」であろうと異論を説えている。Bostetter, *op. cit.*, p. 323.

(41) Baker は，前世を全く思い出せぬ Shelley の Rousseau と Wordsworth の "Ode : Intimations of Immortality" の子供との相違をあげている。Baker, *op. cit.*, pp. 332－335. 例えば，Wordsworth の詩には次のようにある。「われらの誕生は眠りと忘却に過ぎぬ，／われらと共に昇る魂，われらの生命の星は，／それまで何処か他の所に沈んでいて，／遠方から来るのである。／すつかり忘れているのでもなく，／全く裸かでもなくて，／栄光の雲の裳裾を曳きつゝわれらは／われらの故郷である神の許から来るのだ。」(Ll. 58－65) 所で，前世の忘却の考えは，Shelley の場合，寧ろ，例外的で，彼の他の詩には Wordsworth 的な前世の記憶の信仰が見られる。*E. g.* "echoes of an antenatal dream," *Epipsychidion*, l. 456 ; "memories of an antenatal life" [of Prince Athanase], *Prince Athanase*, Ⅰ. 91.

(42) Hutchinson, ed., *op. cit.*, p.14.

(43) Yeats, *op. cit.*, pp. 88, 89, 94.

(44) Carl H. Grabo, *The Magic Plant : The Growth of Shelley's Thought* (Chapel Hill, 1936), p. 409 ; O' Malley, *op. cit.*, pp. 83－87.

(45) Butter, *op. cit.*, pp. 145, 105. Butter は，この「姿」は Yeats の言うような Venus ではなくて太陽であると言つている。Butter, *op. cit.*, pp. 30, 75, 142, 145.

(46) King-Hele, *op. cit.*, p. 353.

(47) Yeats, *op. cit.*, pp. 89－90.

(48) Baker, *op. cit.*, p. 267 ; King-Hele, *op. cit.*, p. 352. 伝統的には，Rousseau は Nepenthe を飲んだと解釈されて来た。See Yeats, *op. cit.*, pp. 89－90 ; Bostetter, *op. cit.*, p. 324 ; Reiman, *op. cit.*, p. 67. しかし，この伝統的な解釈の場合，Nepenthe は，ironical に使用されている (Bostetter, *op. cit.*, p. 188) とか，Milton の Comus の Nepenthe のように禍をもたらす飲物と考える (Reiman, *op. cit.*, pp. 64－66) ことが必要となろうし，これを差し出した「全く輝やかしい姿」には世俗的な不純な属性を一部分認めざるを得なくなる。See Reiman, *op. cit.*, pp.

63－64.

(49) Peck, *op. cit.*, Ⅱ, 276.

(50) Neville Rogers, *Shelley at Work* (Oxford, 1956), p. 302.

(51) Butter, *op. cit.*, p. 10. こゝに,「[Shelley の] 人生と感情の歴史の理想化」である *Epipsychidion* (To John Gisborne, June 18, 1822 : Jones, ed., *op. cit.*, Ⅱ, 434) と *The Triumph of Life* における Rousseau の人生と感情の歴史の理想化との根本的な相違の原因がある。See Baker, *op. cit.*, p. 263.

(52) 註 (33) 参照。

(53) Shawcross, ed., *op. cit.*, p. 56.

(54) *Ibid.*, p. 52.

(55) *Ibid.*, pp. 155, 156.

(56) "On Love" : *ibid.*, p. 45 ; *Epipsychidion*, ll. 169－173.

(57) *Ibid.*, p. 138.

(58) Butter, *op. cit.*, p. 103.

(59) 世界の運命や人生などを表わす「流れ」や「泡」の象徴は，次の詩行によく表わされている。「次々に世界は絶え間なく／生まれては滅び移り行く，／川面にきらめき，破れ，運び去られる／泡のように。」(*Hellas*, ll. 197－200)
See also *The Triumph of Life*, ll. 244－251.

(60) Reiman, *op. cit.*, p. 27.

(61) Reiman は，*The Triumph of Life* には，ライフ・サイクルを象徴する季節のサイクルと日のサイクルが使用されていることに注目している。*Ibid.*, p. 82.

(62) *Ibid.*, p. 79.

(63) Butter, *op. cit.*, pp. 83, 103. Reiman は，74行－175行に言及して，Shelley は，こゝで，「外からは必然の力，内部からは制し得ない激情を前にした人間の無能力」を述べているのだと言つている。Reiman. *op. cit.*, p. 28.

(64) Hutchinson の Oxford 版において，詩は "'Then what is life ? I cried.'－" (l. 544) で終つているが，Dr. Richard Garnett によつて，写本から，これに続く次の行が加えられ，C. D. Locock によつて初めて Shelley's *Poetical Works* (3 vv., London, 1911) において公けにされた。See Peck, *op. cit.*, Ⅱ, 277. "The cripple cast／His eye upon the car, which now had rolled／Onward, as if that look must be the last,／And answered 'Happy those for whom the gold／Of－'"

(65) Peck, *op. cit.*, Ⅱ, 277. これに対して，Donald H. Reiman は，Shelley の写本を再検討した結果，"gold" は "fold" であると解し，"gold" と読んだ場合，whom 以下が否定節となるのに対して，肯定的な節を推測している。Reiman によると，この "fold" は，Shelley が晩年屢々用いた「人間救済の象徴」であり，また，夕方，羊をおりに入れる頃に現われる「宵の明星」(Hesperus)，すなわち，"the folding-star" と関係をもつキリスト教の羊舎」(the sheep-fold) －そこに，この愛の星に従う者らが集まる－のメタファー－である。Reiman, *op. cit.*, p. 83. この二説の中，いずれをとつても，根本的な意味に変りはない。

(66) Rogers, *op. cit.*, p. 301.

(67) Preface to *The Revolt of Islam* : Hutchinson, ed., *op. cit.*, p. 37.

(68) この引用において，特に，Reiman のテキストによつた。Reiman, *op. cit.*, pp. 199－200. 尚，「憎悪と畏怖の言葉で」(In words of hate and awe) に関して，Reiman は，「憎悪の言葉で」とは「『地獄篇』で」，「畏怖の言葉で」とは「『天国篇』で」，と解釈している。Reiman, *op. cit.*,

p. 78.

(69) *A Defence of Poetry* : Shawcross, ed., *op. cit.*, p. 114.

(70) 註 (33) 参照。

(71) King-Hele は，これは，俗世の迂闊にあくせくと働き，活力を早く消耗しつゝある人々への忠告であると言つている。King-Hele, *op. cit.*, p. 359.

(72) Butter, *op. cit.*, pp. 83, 214.

(73) 断片 *The Triumph of Life* を評価して，J. A. Symonds は，「〔Shelley の〕傑作の最も崇高なものの一つ」と断言し (J. A. Symonds, *Shelley*, London, 1879, p. 170), Edward Dowden は，Shelley の「天才の新しい，より高次の発展への出発点」であつたかも知れぬと言つている (Edward Dowden, *The Life of Percy Bysshe Shelley*, London, 1886, Ⅱ, 507)。最近でも，Carlos Baker は，「価値評価するにそれだけで十分完全な断片」と言い (Baker, *op. cit.*, p. 255 n), Donald H. Reiman は，詩は完結されない断片の状態であるが，「文体上，高度の完璧さを示している」と好意的な評価を下している (Reiman, *op. cit.*, p. 86)。そして，特に注目すべきことは，現代の，Shelley の二人の代表的な酷評家である F. R. Leavis と T. S. Eliot までが，この詩だけは，Shelley の最もすぐれた詩，ないしは，すぐれた英詩の一つと考えるていることである。Leavis は，*The Triumph of Life* は，Shelley が大方「殆んど読むに耐えられぬようになつた時でも，尚も回顧し得る，Shelley の僅かな作品の一つである」ことを認め (F. R. Leavis, *Revaluations*, New York, 1947, p. 231), Eliot は，早くに，この詩をもつて，Shelley は Dante のあとを継ぎ得る唯一人の十九世紀詩人であると述べ (T. S. Eliot, "Essay on Dante," 1929 : *T. S. Eliot : Selected Essays*, London, 1963, p. 264), 後，この詩において，彼はイギリスの他の詩人よりも Dante の精神に近づいたと言つている (T. S. Eliot, "A Talk on Dante," *Kenyon Review*, XIV, Spring, 1952, pp. 183－184)。

Summary

"THE SACRED FEW" AND "THOSE DELUDED CREW" IN *THE TRIUMPH OF LIFE*

Norikane TAKAHASHI

In this study the writer examines the important contrast between "the sacred few" and "those deluded crew" formed throughout *The Triumph of Life* (1822), Shelley's swan song. He shows that the former represents those who, by their imagination, succeeded in arriving at the knowledge of "love" harmonizing the passions within their souls; while the latter represents those who, instead of imagination, chose reason, the faculty unable to "know themselves" or to "repress the mutiny within" (*i. e.* their inner passions), and so, driven by the "mutiny," became the victims of worldly life, and perished in misery and tragedy. Thus the writer concludes that it may be Shelley's moral intention in the poem to suggest to his readers the necessity of "love" as "the great secret of morals" and of imagination as its "great instrument."